

大正4(1915)年創部
全国2番目の歴史と伝統

桂俱樂部 100年



■第12回中部連盟クラブ対抗野球大会優勝

本市に本拠地を置く硬式野球チーム「桂俱樂部」は、本年100周年を迎えます。

桂俱樂部の創始者「奥源^{おくげん}緑」の「野球で培われた健全な精神こそ郷土発展につながる最善の道」を部訓として、地域に根差した活動を続けてきました。

3回目となる今回は、桂俱樂部の中興期をご紹介します。桂俱樂部100年のあゆみをたどります。

【桂俱樂部中興期】

昭和49年に創始者であり、俱樂部最大の後援者奥源緑がこの世を去り、精神的支柱を失った桂俱樂部に廃部の危機がおとずれました。

昭和51年、クラブ日本一を決める「第1回全日本クラブ対抗野球大会」が開催されましたが、桂俱樂部は、都市対抗野球予選に出場を続けることだけで他の大会に参加する余力はありませんでした。さらに昭和52・53年には、都市対抗野球大会さえも棄権し、日本第二の60余年の伝統も消えてしまうのではないかと思われました。

しかし、昭和54年に創始者「奥源緑」の次男(奥隆行)が都留野球史回顧録を発刊したことにより、桂俱樂部の存在価値が見直され、桂俱樂部OBの中から「伝統の灯を消してはいけない。」との機運が盛り上がってきました。

当時の都留市野球連盟役員でもあり、俱樂部OBの(佐野勝太郎)が(※)谷内秀

雄(庄司寛)らと共に、谷村工・桂高出身者を中心に20歳前後の選手を集め、桂俱樂部の再編成がなされました。

昭和55年、第51回都市対抗野球山静大会に出場した「新生桂俱樂部」は、静岡県営草薙球場において「協和発酵クラブ」「峡北クラブ」を降し、準々決勝へ進出しました。

準々決勝では「河合楽器」に敗退しましたがこの大会での勝利は、昭和41年以来、14年ぶりの公式戦勝利でした。ここに桂俱樂部は、復活し、100年の歴史に向かい、歩みを始めました。その時のメンバーの中以後の桂俱樂部及び都留野球界を牽引していく人材が含まれていました。(※)鈴木信行「現監督、市野球連盟社会人部長」、(高部博志)「現コーチ、市野球連盟審判部長」、(杉山肇)「現部長、市野球連盟副会長」、(※)森雅志)の同級生カルテットです。

昭和60年7月甲府緑ヶ丘球場で開催された第10回全日本クラブ対抗野球山静地区予選において桂俱樂部は、静岡県の古豪「全三島クラブ」「静岡クラブ」を撃破し、準決勝にコマを進めました。が、「岳南クラブ(静岡)」に敗れ、全国大会への夢は、断たれました。一回戦の「全三島クラブ」戦において、(鈴木信行)がサイクル安打を記録しました。山梨県社会人野球界初の快挙であり、最高打撃賞が授与されました。

9月、市営梁山球場において第12回日本選手権山梨県大会を「桂俱樂部70周年記念大会」として開催。「山梨球友クラブ」と対戦、6点差を追いつき、劇的な逆転サヨナラで決勝に進出しました。決勝では、「オール櫛形」に敗れ、優勝こそ

逸しましたが主将(柏木正男)が打撃賞を獲得しました。

昭和61年5月、第30回選抜社会人新潟大会に推薦出場した桂俱樂部は、前年の第55回都市対抗野球本大会において農協旋風を巻き起こした「岩手経済連」と対戦しました。

初回に(鈴木信行)の3点本塁打などで4点を先取、その後も岩手を上回る13安打を放ち優位に試合を進め「ノンプロ」を破る金星を上げることができたか」と期待が高まりましたが追加点を奪えず4対6で逆転負けを喫しました。

しかし全国レベルのノンプロとの互角の戦いにチームは自信を深めていきました。

桂俱樂部に最高の時がやってきました。8月、甲府緑ヶ丘球場において開催された第12回中部連盟クラブ対抗野球選手権大会において、「オール松本」(長野県)準決勝で「オール櫛形」、決勝戦、「市川クラブ」を撃破し、中部地区クラブチームの雄が覇を競ったこの大会において念願の初優勝を飾りました。

山梨大会制覇は過去に何度もありましたが地区大会での優勝は、長い歴史の中でこれが初めてのことでした。

※1 谷内秀雄:「ノンプロ口日本軽金属」で5年間プレー、桂俱樂部監督(6代目)「中学硬式野球都留リトルシニア」初代監督

※2 森雅志:この翌年からエースとして桂俱樂部を支え、現役引退後は、地域少年野球の指導者として青少年の育成に力を注いできました。しかし、平成14年5月4日、少年野球の指揮をとった翌日に突然の病で早世。